

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2013年7月15日（月）

場 所：名古屋キャンパス N棟3階 社会倫理研究所 会議室

テーマ：唐山から汶川へ——中国の災害文化について

報告者：王 曉葵（中国華東師範大学教授）



度重なる災害の経験から生まれた知恵を住民の多くが共有し、後世に伝える際に、災害に対する新しい考え方が生まれる。災害についての知識や伝承、あるいはそれに対応する方法や技術的産物のことを災害文化という。

災害文化の重要な一部分として、災害に関するマスコミの報道・被災者の証言・政府の公文書・専門家の記録・記念館・遺跡など、様々なジャンルで散在している資料を収集・整理・分析し、「災害の記録と記憶の伝承」として整理する必要がある。

この「災害の記録と記憶の伝承」の収集と分析によって、災害時の人々の心理や行動パターン・被災者の救済・行政の対策・情報の流れ・死者の追悼など、災害に対するさまざまな社会的対応の様相を知ることができる。こうした資料群を災害に関する「集合的記憶装置」として捉え、その総合的な調査分析を通じて、災害に対する社会の防災能力を高める活動につなげていくべきだろう。

また、災害は「もの」だけではなく、社会システムをも破壊する。災害文化の研究を通して、ある社会の政治体制・社会構造・文化的伝統などを明らかにすることもできる。

本発表では、1976年7月28日に発生した唐山大震災、2008年5月12日に発生した汶川大震災の記憶空間の構築と、1976年から2010年代までの30年間における中国の災害文化の変遷を探る。

1976年7月28日3時42分54秒、中国河北省唐山・豊南付近（東経118.0度、北緯39.4度）で、マグニチュード7.8の直下型地震が発生した。被害範囲は約21万平方メートル、重傷者は16.4万人、死亡者は24.2万人に達した。

地震後、国家権力が公共記念空間の構築や公的追悼と記念行事の開催及び一部の個人体験談の「徴用」によって、この大規模な被害の記録と記憶を固定化させた。その特徴は、災害による被害及び苦痛の記録と記憶を弱め、救済や復旧復興の成果を強調することにある。これを通して、特定の政党及び社会制度の「優越性」が証明される。このような「処理」の方法は一定の効果があるが、人々にとっては個別的な追悼の必要もあるので、民間では依然として「焼紙」のような伝統的な追悼方式を守っている。1949年以来、共産党政権は民間組織に対してこれを弱体化させ取り締る政策を取り、特に都市において、すべての人がある「単位」（所属する会社や政府機関など）に所属することになった。この「単位」は仕事の間であり、医療・出産・住宅・教育・葬式などのサービスの提供者でもある。これによって、伝統的な地縁と血縁に基づいて成り立つ地域社会は破壊され、人々の横のつながりは縦の社会関係となった。さらに、もともと民間葬送習俗を伝承してきた主体が社会的な基盤を失った。唐山においては、日本の阪神淡路大震災のように、多くの民間組織が記念行事を行うことは、見られない。

こうした民間組織の欠如は、商業資本の進出に機会を与えた。民間会社が料金を徴収して地震記念壁を建造する、ということは現代中国の市場化による資本が公益の領域へ進出している現象として理解できる。ここで生じた対立は、商業資本が地域社会・民間組織の役割を替代できないことを物語っている。追悼習俗は、国家権力と商業資本の二重の影響によって変化している。

唐山大震災の記憶化の過程を追っていくと、1970年代から21世紀初期までの中国の政治体制・社会構造・人々の意識などの災害記憶に対する影響が理解できる。そして、2008年5月に発生した汶川大震災の記憶化の状況と比較することによって、中国社会における災害意識の変遷がわかる。

汶川大震災は、2008年5月12日14時28分に四川省汶川を中心に発生した大地震で、地震の規模は中国地震局が公表した数字ではマグニチュード8.0に達している。この地震による被害は極めて大きく、2008年7月22日の中国民政部の公表によると、死者は6万9197人、負傷者は37万4176人に達した。

唐山大震災の時と違って、地震発生直後、新聞・テレビ・ネットなどでは、一日中被害状況や、救援の進展などを報道した。その内容は「美談」・「感動的」な報道を中心とする。具体的には、1. 支援の輪の全国・全世界的な拡大、2. 政府・人民解放軍・ボランティアなどの献身的救助、3. 家族の愛、4. 被災者の生きようとする強い意志、である。

こうした報道の仕方は、受け手に衝撃を与え、被災者への同情や哀悼を呼び覚まし、また支援活動や支援の輪を広げるには、非常に有効だといわねばならない。しかし、このような報道は外岡英俊氏が言うように、「ある時点で『記録』と質を転換しない限り、被災地の外部の目は、「同情」と「憐れみ」という上滑りの感傷として、いずれ忘れ去られているに違いない」（外岡秀俊：『地震と社会 下』みすず書房 1998年7月、716頁）。

また、記憶表象の構築もいち早く行われた。1. 汶川地震記念館、記念碑の建立、2. 地震遺跡の保存、3. 公墓の建設、などはすでに行われ、政府・地域・民間は連携して、災害の記憶化を進めている。これは唐山大震災の時代と大きく異なる。

また、他の変化も見られる。例えば、1. 記録の一元化→多元化、2. 地域社会の欠如→ボランティアの存在、3. 自然と対峙する災害観→自然と共存する認識、4. 救援における孤立主義→国際的連携などである。

理想的な災害記憶には、外岡秀俊氏がいうように、客観的な資料に基づいて作り上げた「事件の全体像」と、臨場感のある「実景」の再現が「記録」としての不可欠の要件だと思われる。

（文責：王 曉葵，蔡 毅）